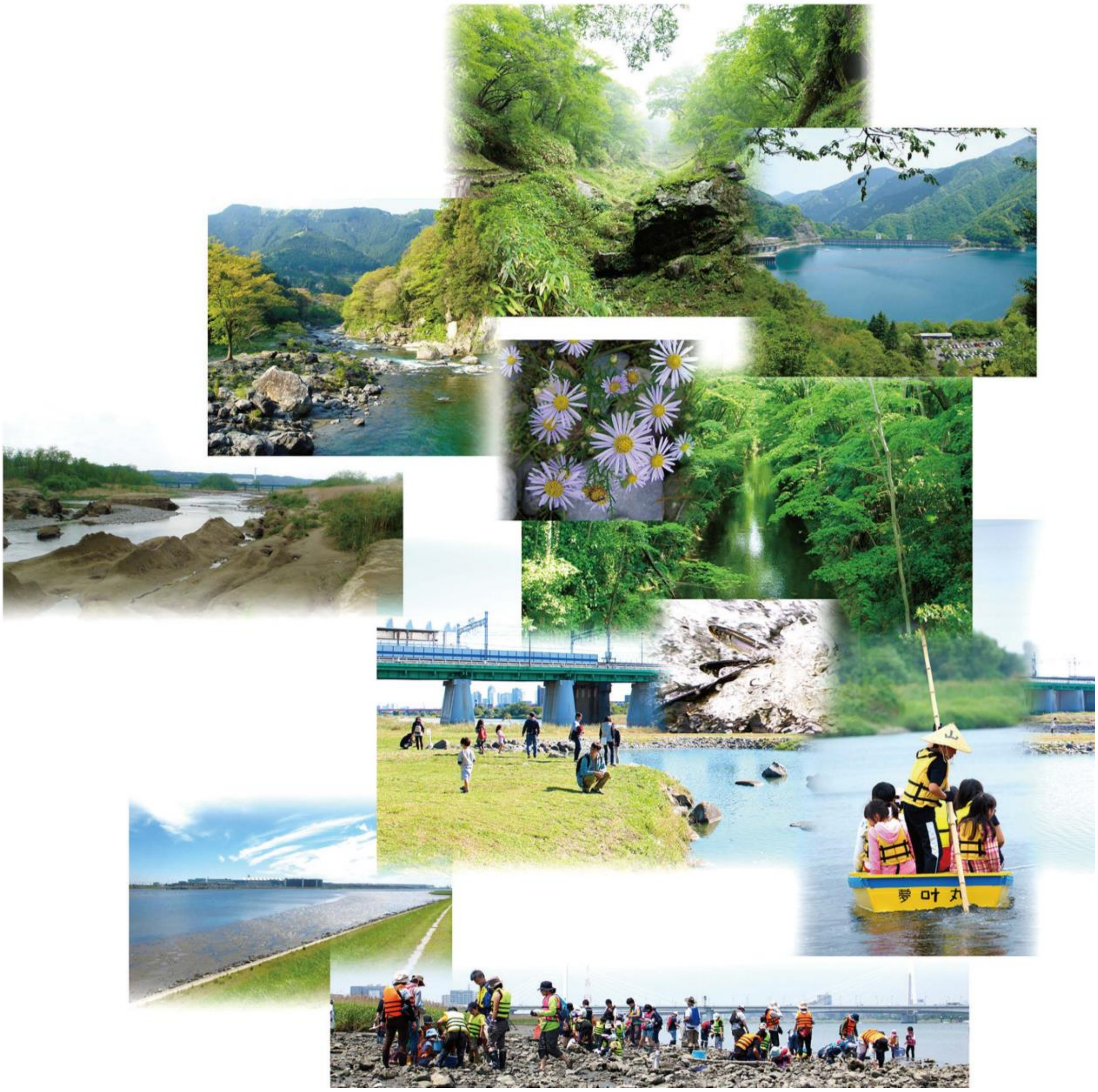
第 11 回多摩川流域歴史セミナー　開催報告

「多摩川と街道が交わる二子玉川の地誌を学ぶ」



第 11 回多摩川流域歴史セミナー　開催報告（詳細版）

目　次

1. 開催概要 1
2. 午前の部：現地散策 1
2.1 玉川陸閘 1
2.2 二子の渡し跡 1
2.3 玉川水位観測所 2
2.4 築堤工事箇所 2
2.5 二子橋の親柱 2
2.6 二子玉川地域と水の流れ 2
2.7 大山街道・調布橋・六郷用水 3
2.8 上野毛自然公園 3
2.9 二子玉川分庁舎前の道路植栽帯 3
2.10 二子玉川公園 3
3. 午後の部：多摩川流域歴史セミナー 4
3.1 開会挨拶 4
3.2 基調講演『近世から近代の多摩川の河川水運』 4
3.2.1 はじめに 4
3.2.2 渡船 4
3.2.3 物資輸送 5
3.2.4 おわりに 6
3.3 質疑応答・意見交換 6
3.3.1 概要 6
3.3.2 意見交換 6
3.4 閉会挨拶 13

第 11 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川と街道が交わる二子玉川の地誌を学ぶ」

2023 年 10 月 7 日（土）10:00～16:00

場所：午前の部：二子玉川駅～二子玉川公園　　午後の部：世田谷区二子玉川分庁舎・WEB 配信

参加者：午前: 23 名、午後: 45 名（会場 17 名、WEB28 名）　　主催：多摩川流域懇談会

1.　開催概要

テーマ：多摩川と街道が交わる二子玉川の地誌を学ぶ

日　程：令和 2023 年 10 月 7 日（土）10:00～16:00

午前の部：10:00～12:00

午後の部：13:00～16:00

形　式：午前の部：現地散策（二子玉川駅～二子玉川公園）

午後の部：第 11 回多摩川流域歴史セミナー

（世田谷区二子玉川分庁舎／オンライン開催（ZOOM））

主　催：多摩川流域懇談会

登壇者：角和 裕子氏（世田谷区郷土資料館）

参加者：午前の部：23 名、午後の部：45 名（会場参加 17 名、Web 参加 28 名）

2.　午前の部：現地散策

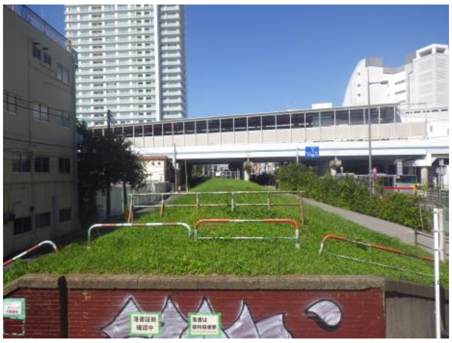
多摩川流域懇談会運営委員会の神谷氏より開会の挨拶があり、現地散策がスタートしました。昔多摩川は、あばれ川と呼ばれ架橋が難しかった事から、渡河には船が利用されてきました。宿場として栄えた多摩川から、時代を超えた現代までの数々の歴史を班ごとにめぐり、各地点にて専門の方から説明を聞きながら多摩川と二子玉川の地誌を学びました。

2.1　玉川陸閘

<主な内容>

・古くから水害に苦しめられてきた二子玉川周辺では、大正 7 年から堤防の整備が行われました。この堤防を人馬が越えるのは大変なため、堤防の一部を削り、道としました。

・玉川閘門は、水位が上昇した際に道を手動で締め切って水害を防止する役割を果たしました。



2.2　二子の渡し跡

<主な内容>

・二子と瀬田を結ぶ旧大山街道の「二子の渡し」は、元禄年間にはあったと伝わっています。この渡しは、大正 14 年二子橋が完成したことにより廃止されました。

・現在は渡しの復活のイベントも行われています。

2.3　玉川水位観測所

<主な内容>

・各水系の重要な地点に水位自動観測所が設置されており、その一つが二子玉川にあります。

・河川の上流・中流・下流の増水・減水状況などをそれぞれ同時に収集・伝達することができ、水害の予防のために常に観測を行っています。

2.4　築堤工事箇所

<主な内容>

・多摩川緊急治水対策プロジェクトの河川における対策として、無堤地区からの溢水を防止する対策である、二子玉川地区の築堤工事を進めています。散策では、実際の工事箇所を視察しました。

2.5　二子橋の親柱

<主な内容>

・大正 14 年にできた最初の二子橋は、交通量の増大に伴い、昭和 35 年には橋の幅を拡げて現在の二子橋となりました。ここから北へ 500m ほど離れた国道 246 号線沿いに、かつての二子橋の親柱が保存されています。

2.6　二子玉川地域と水の流れ

<主な内容>

・二子玉川地域の地形と水の流れについて、崖線上からの雨水が丸子川に流入する場所を確認しながら、ご説明をいただきました。

2.7　大山街道・調布橋・六郷用水

<主な内容>

・大山街道として栄えた道路を、調布橋・六郷用水を視察しながら散策しました。

・水路には清澄な水が流れており、二子玉川の自然を感じました。

2.8　上野毛自然公園

<主な内容>

・台地を多摩川が 10 万年以上かけて削ってできた国分寺崖線上にある公園です。公園の成り立ちや湧き水について、教えていただきました。

2.9　二子玉川分庁舎前の道路植栽帯

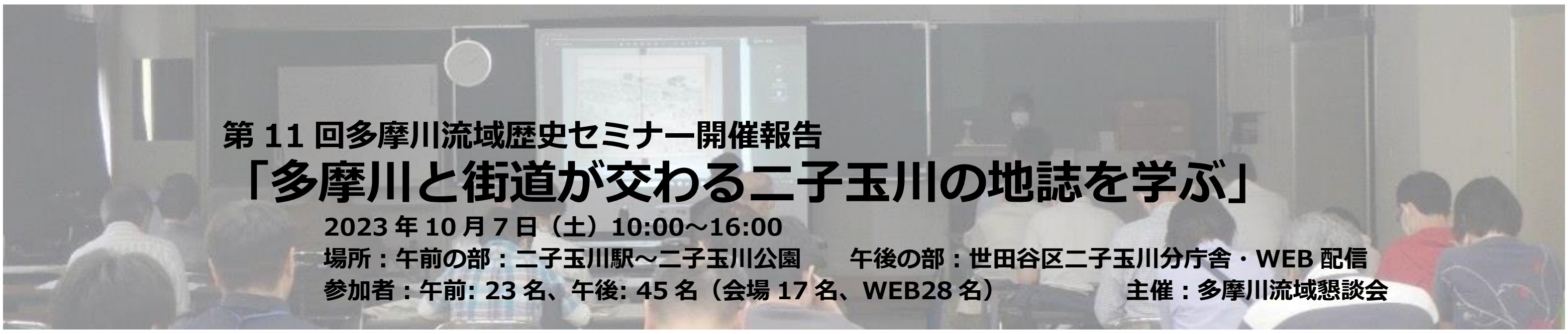
<主な内容>

・排水性舗装と道路植栽帯を組み合わせて、車道に降った雨を街きょますを通じて植栽帯に導き、雨水をより効率的に浸透させています。身近な場所のグリーンインフラを知ることができました。

2.10　二子玉川公園

<主な内容>

・平成 25 年に開園し、国分寺崖線のみどりと多摩川の水辺に囲まれた場所に位置している自然豊かな公園で、本格的な日本庭園があります。多くの人が訪れ憩いの場となっていました。



第 11 回多摩川流域歴史セミナー開催報告

「多摩川と街道が交わる二子玉川の地誌を学ぶ」

2023 年 10 月 7 日（土）10:00～16:00
場所：午前の部：二子玉川駅～二子玉川公園　　午後の部：世田谷区二子玉川分庁舎・WEB 配信
参加者：午前: 23 名、午後: 45 名（会場 17 名、WEB28 名）　　　主催：多摩川流域懇談会

3.　午後の部：多摩川流域歴史セミナー

3.1　開会挨拶

多摩川流域懇談会運営委員長の神谷氏より、開会の挨拶およびセミナー主催の「多摩川流域懇談会」についての説明があり、第 11 回多摩川流域セミナー午後の部が開会されました。

＜主な内容＞

・多摩川流域懇談会は、多摩川に関わる全てのステークホルダーで話し合いの場を作り、緩やかな合意形成ができるような仕組みを作っている。

・多摩川流域セミナーは、多摩川水系河川整備計画づくりについて、多摩川に関わる人々と話し合う機会の場として始まった。そこから川を歩いて意見交換することを始め、多摩川流域セミナーの活動が続いている。

3.2　基調講演『近世から近代の多摩川の河川水運』

世田谷区郷土資料館の角和氏に二子玉川地域、世田谷区域を中心とした河川水運の歴史についてお話を頂きました。

3.2.1　はじめに

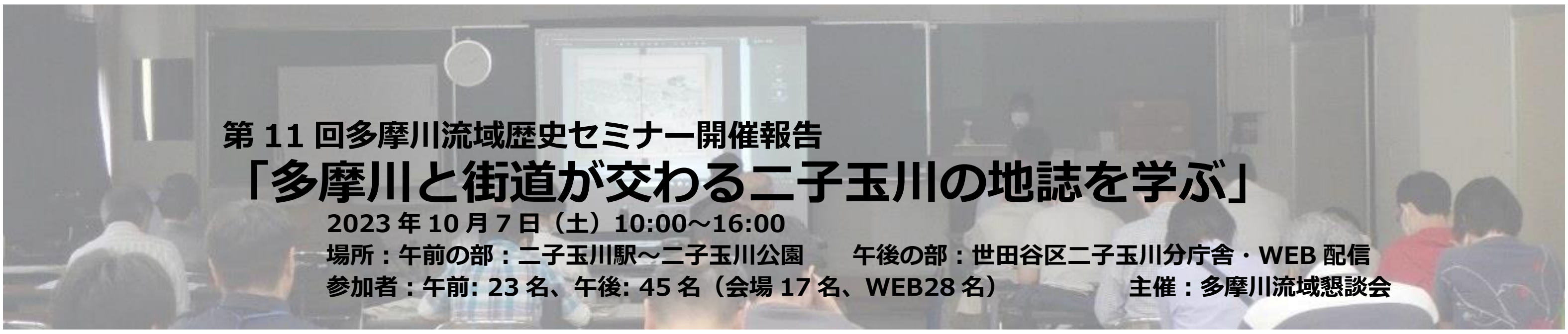
・　時代の異なる2枚の多摩川を描いた絵図から、河川水運の歴史を紐解いた。昭和の初期の「多摩川絵図」には、河口部から上流まで、流域の様々の地点の様子が描かれており、沿岸に立ち並ぶ旅館や料亭、二子橋、玉川電車など、二子玉川は、いわゆる行楽地のようになっていたことがわかる。江戸時代の多摩川を描いた「調布玉川惣画図」には、「多摩川絵図」で二子橋が架かっていた辺りには、棹をさして船を渡している、二子の渡しの様子が描かれている。下流では、荷物を積んでいるような船や、帆かけ船、いかだも描かれていた。この2枚の絵図から、江戸時代から昭和にかけて多摩川の水運で物を運ぶことや渡し舟が一般的であったが、時代とともに徐々に船による舟運や、多摩川による物を運ぶ・人を運ぶということが影を潜めていったことということがわかる。絵図の比較や資料から、多摩川の舟運の歴史を紐解いていく。

3.2.2　渡船

・荷物を運ぶ船や渡し船として、等々力村や下野毛村の「平田船」、瀬田村の「馬渡船」や「歩行渡船（かちわたしぶね）」などがある。

・江戸時代には多摩川上流から下流まで合わせると40か所近い渡船場があった。江戸時代には橋を架けてしまうと江戸が攻められるといった軍事的理由や技術不足であったため、渡し船が一般的であった。しかし冬には仮橋を設けて馬も渡れる橋が造られていた。橋のたもとには渡船小屋、船頭が住んだ小屋が見られた。

・「玉川流域絵図」とは明治4年に作られたもので、多摩川の堤防の管理に関して様々な取



決めがなされるときに、民部省土木司の指示を受けて作られた。絵図には、断続的な堤防や、用水の取水口、地名などが描かれている。多摩川の両岸に同じ地名あるのは、元々川向かいではなくまとまった一村だったと考えられる。それが川の流れにより分断されたため、渡し場、渡船場がつくられた。

・二子渡しは、大山街道と二子村へと続く道で、大きな街道上の渡し場だった。しかし大正14年に二子橋が開通したことで、渡し船は廃止された。

3.2.3　物資輸送

(1)　米（年貢米）、農作物等

・渡し船は年貢米の輸送に非常によく利用された。多摩川沿いで70か所以上の村々が年貢米の輸送のために多摩川を利用していたことが明らかになっている。渡河には、馬よりも船の利用が活発であった。

・江戸時代世田谷区に飛び地を持っていた彦根藩は、多摩川を使って江戸へ米を運んでいた。具体的には、まず村から一番近いに船着き場に米を運び、次に領主の元まで運ぶ。川に荷物を出すことを「津出し」というが、津出しして、それぞれの場所に運ぶということが行われていた。その年貢米の運送は、実は村が直接というよりも、羽田の人たちに依頼して江戸まで運んでもらっていた。羽田の人たちは船稼ぎ、沿岸部の仕事を色々生業にしており船が100艘以上もあり、幕府から特権的に認められていた。河川を運搬後、河口部の辺りで、川の船から海の船に積み替え、年貢米は、領主の蔵に運ばれた。蔵の中には御船入という形で船が入れるような堀が作られている。米蔵を納めやすいような位置に米蔵が作られていた。

・ある村では野菜の出荷を船でしていたという記録や、江戸時代、菜種を市場で船に積んで幕府へ上納したという記録が出ている。年貢米だけではなくて、村で生産された農作物も舟運を使って川を下して江戸へ運ばれていた。

(2)　肥料（〆粕、醤油粕）、塩、石材、その他

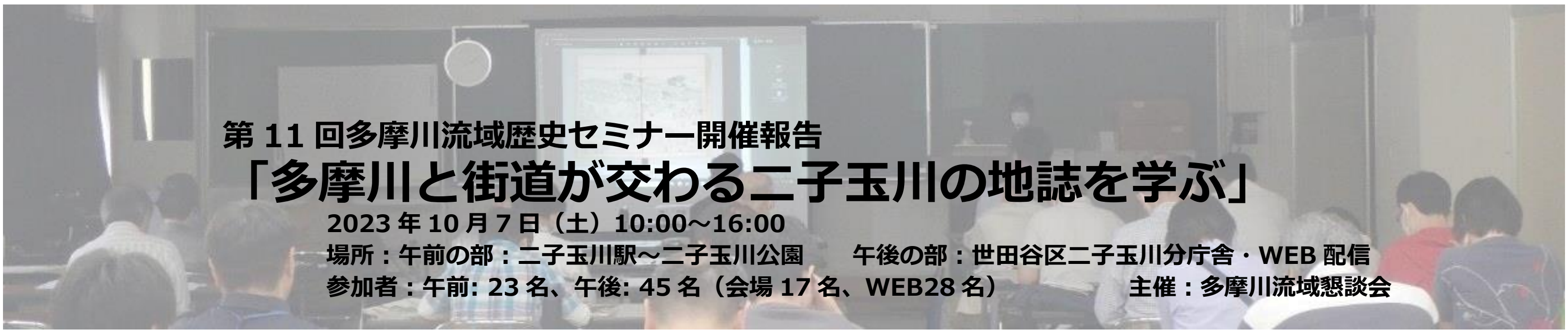
・年貢米や農作物は主に上流から下流に物資輸送が行われていたが、下流から上流向かって船に物を運ぶことも行われていた。

・天保14年に神奈川県横浜市にある本牧辺りへ「〆粕」というものを買いに行った記録がある。それから羽田へ戻り、船着き場に到着して陸に揚げている。その翌日には糀屋さんに売り渡して多摩川の上流域に運んでいる。

※〆粕：イワシなど魚などをゆでて油を搾り取った後のかすのこと。砕くと肥料として使えて、これを俵詰めにしたものが流通していた。

・塩も大量に取引が行われていた。西国産の「下り塩」である斎田塩や赤穂塩など、西のほうで作られ廻船などで運ばれていた塩も神奈川の商人から仕入れていた。

・等々力村から下流に酒糀を売るために、船に載せて回漕していた。酒樽も、多摩川を使っ



て江戸湾を通って新川の酒問屋に出荷していた。また、しょうゆ粕を買った宇奈根村の住民は、自分で買うだけではなく近くの村の農民に注文を聞いて取りまとめ、野田の方から来たしょうゆ粕を仕入れ、周辺の人に売るときに船を使っていた。

・江戸時代、「近世以来の石工の居住地は、水運の可能な多摩川流域と鶴見川河口付近とに限られていた」という指摘がある。石造物を運ぶときにも水運は重要であった。

・青梅村からも材木の運搬にも船が重要であった。筏を組んで多摩川河口部まで川下げして、その後は船に積んだり、船に積めないような大きなものだと、引きいかだという船がいかだを引っ張っていくような形で江戸へ回漕したりした。

3.2.4　おわりに

・かつて現在の世田谷区域では多摩川舟運が盛んに行われており、主要な物資輸送手段の1つだった。その中でも、江戸への年貢米の輸送が大部分を占めており、そのほかにも農作物、商品を輸送する手段としても使われていた。さらに、江戸や千葉・神奈川などの遠隔地から流域の村々に、肥料をはじめとした様々な商品をもたらす手段だった。

・舟運を中心的に担っていたのは、羽田など河口の人たちだったが、時期によっては流域の村でも船を所有して物資輸送に従事する人たちが複数見られた。多摩川を通して、陸運も組み合わさって、非常に広い範囲から物が流域の村にもたらされていた。

3.3　質疑応答・意見交換

3.3.1　概要

・セミナーの後半では、それぞれの講演内容に関する意見交換や、参加者からの質問への回答が行われました。

3.3.2　意見交換

(1)　船着き場の形状が示された絵図は残っていないのか。

○角和氏

・江戸川や荒川では何々河岸の絵図ということで、蔵が立ち並んでいる様子をよく見るのですが、多摩川ではそこまで正確なものを残念ながら見たことがないです。

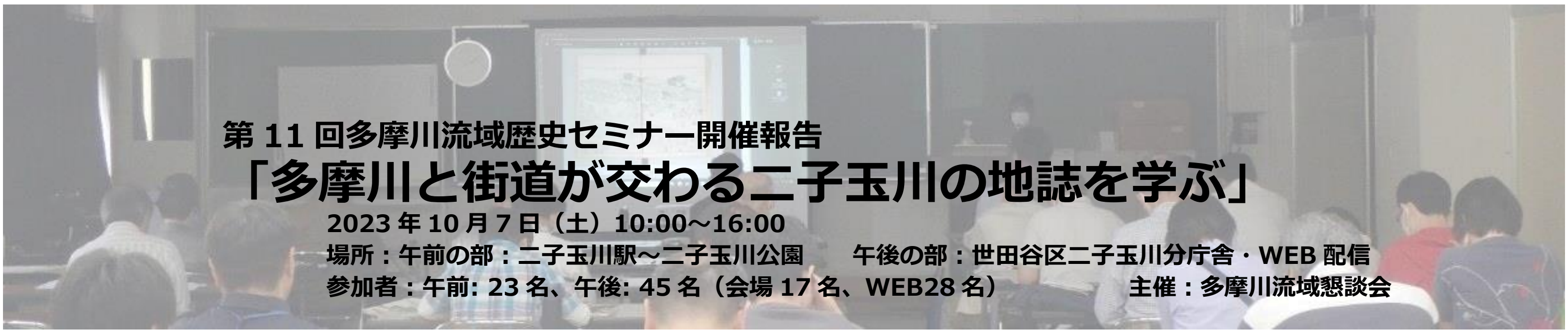
(2)　運び税は取られたか、保険はあったか、川の引上げは馬を使うのか。

○角和氏

・運賃はやはり取られました。おそらく、羽田の人たちが特権的になっていたというのもあり、それでお金を稼ぐというところで、運賃はかかりました。

・保険はわからないですが、難船や破船は川でも起きているので、その際はここまで負担するというような規定はありました。

・よく砂利船とか言いますが、砂利を運んだ船を岸から人が引っ張ってという話はよく



耳にするので、人が引っ張ったというイメージが私はあります。実際に馬を使ったという話はあまり史料上は見たことがないのですが、あり得たかもしれません。

(3)　舟運の河川を遡上するときの動力は風力か。また最大比高差はどれぐらいあったのか。

〇角和氏

・どういう動力で引き上げたかというところで、帆を張ったままという状態の絵図をよく見るので、うまく風の力も使っていたと考えられます。ただ、人の力やもしかすると馬の力も使いながら引き上げたのではないかと考えられます。

〇小野氏

・船を使ったもので史料的に出てきたのは、府中や日野辺りまでで、こういった実態は、恐らく古代・中世においても同じだったのではないかと思います。ただ、上流から下らせる場合には、国府や国分寺の大きな建物を造るために木材を奥多摩から持ってくる、あるいは礎石にする石材を河原から持ってくるということで、上流から下流へという意味では幅広く行っていたのだろうと思います。

(4)　飲料水としても使われた玉川上水の水質はいかがなものだったのか。

〇角和氏

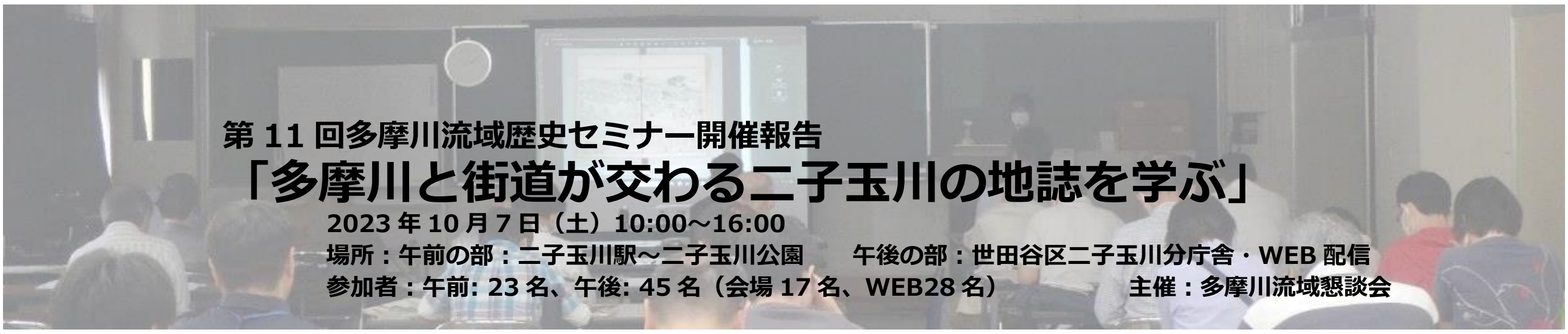
・二ヶ領用水もそうですが、多摩川からたくさん用水を引いていました。六郷用水、丸子川を御覧になったのかと思うのですが、小泉次大夫という人が開削に尽力したということで「次大夫堀」とも呼ばれています。

・水質の話で言うと、江戸時代の史料を読むと、二子玉川の辺りに舟遊びに行った人が、「川底の小石まで見える」というように書き残しているので、きれいではあったと思います。

〇神谷氏

・玉川上水自体は羽村で取り入れているから、上流部のきれいな水質のものだけを取っています。そこからたくさんの分水で配っていくため、配った後、使ったものの分水は汚れていきます。多摩川の用水路の取水の水質はどうかというと、昔はそんなに汚いわけじゃなかったと思います。

・多摩川というのは清流河川として有名でした。それに対して隅田川、荒川というのは、ちょっと川の水質が違います。昔の多摩川の価値というのは、本当にきれいな川だったから、アユも名所になっていたのです。



(5)　「季刊『多摩のあゆみ』では、多摩川沿いに大きな都市が発展しなかったのは舟運が盛んではなかった、その理由は土砂の流出が激しく暴れ川だったせいと論じられていた。この点についてはどうか。

○角和氏

・「多摩のあゆみ」に書かれていることは実際にそうだと思います。

・多摩川の舟運については、比較対象によると思うのです。例えば江戸川、荒川、利根川とかの河川に比べると、やはり多摩川は急流で、水量が少ないということで、一般に水運にはあまり適さないと言われています。私も利根川などの史料を見ますと、そちらに比べると、多摩川というのは、これでも微々たるものかなという印象はあります。だから、今まであまり多摩川の舟運は注目はされていなかったのだと思います。盛んでなかったにしろ、これだけのものが運ばれていたということを、今回は御紹介をしました。

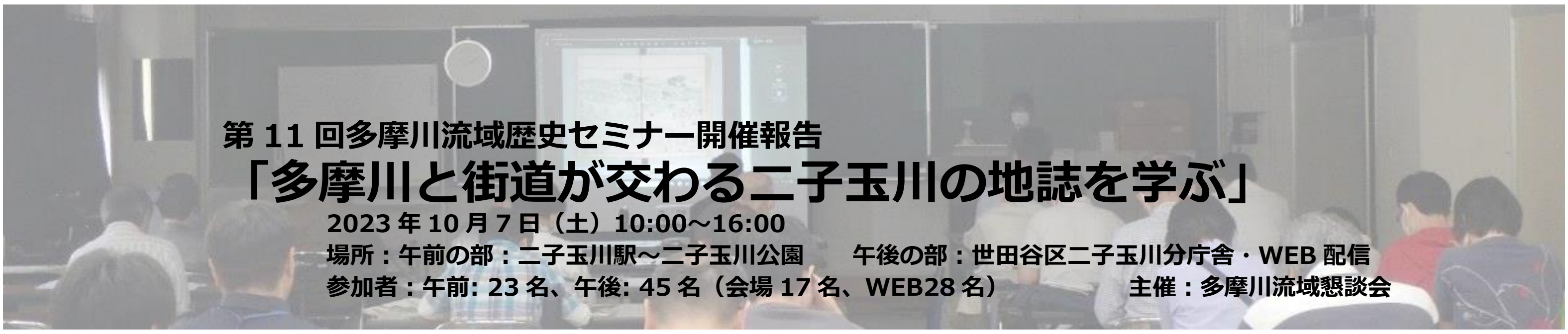
○横田氏

・多摩川では、とても豊かな物資が運ばれていました。特に流域の中でとれたものを江戸に下ろすという観点で言うと、多分、地形的に限られた範囲でつくられているものを集約して、多摩川に点々と点在する荷積み場所から積んでいたのかなと思います。すると、各点ごとに、その裏に生産的なネットワークがあったり、小さな物流があったり、村を拠点とした商いがあったりしたことが考えられます。そういったことから考えると、大きな何かネットワークというよりは、細かい点の連なりがそういった往来を支えていたのかなというように感じます。まして、それが江戸とつながっていたということで考えると、江戸はすごくエコロジカルな町であったというふうに聞きますけれども、そういった小さい物流の蓄積がそういったものを、ある意味、水側から支えていたのかなと思いました。

(6)　渡船について、恒常的な架橋がされなかったのは、渡しの人々の仕事を奪われるという反発も要因として考えられるか。

○角和氏

・私はその視点はありませんでした。確かに渡船場の人、渡船を担っていた船頭さんにとっては、架橋してしまったら仕事が奪われるという側面もあったのかなとも思いますが、一方で、前に見た史料で、橋が架かっている時期にも橋を渡るのにお金を取っているものがあります。船でも橋でもどちらでもお金は取られたのかなという気はするので、船頭さんがそれで仕事を奪われるということは必ずしもなかったかもしれません。



(7)　年貢米を羽田に運んだ船が帰りに別のものを載せる場合、それを取り仕切る仕組みがあったか。

〇角和氏

・年貢米に関していえば、羽田の船が担っていたということを考えると、「年貢米をそこまで運んでください」ということで終わっていたのかなというようには思います。

・ただ、村とか、村の中の個人がそれぞれ持っていた船に関しては、多分、行きにはこれを運んで、帰りには江戸でこれを調達して持って帰るというのは、仕組みというよりも村なり個人持ちなりで完結はしていたと思います。

(8)　多摩川流域絵図で堤防が途切れているのは、霞堤のように意図的にあふれさせる狙いがあったか。

〇角和氏

・私もこれを見たときは衝撃でした。こんなに隙間があったら、この隙間の村はちょっとかわいそうですよね。やはり当時の技術で考えると、堤防を全面にやって防ぐということが難しくて、意図的に途切れさせて、そこからあふれさせる、そのほうがかえって被害が少なく済んだと、そういう意図があったということを示している非常に分かりやすい絵図なのではないかなと私は思います。

〇神谷氏

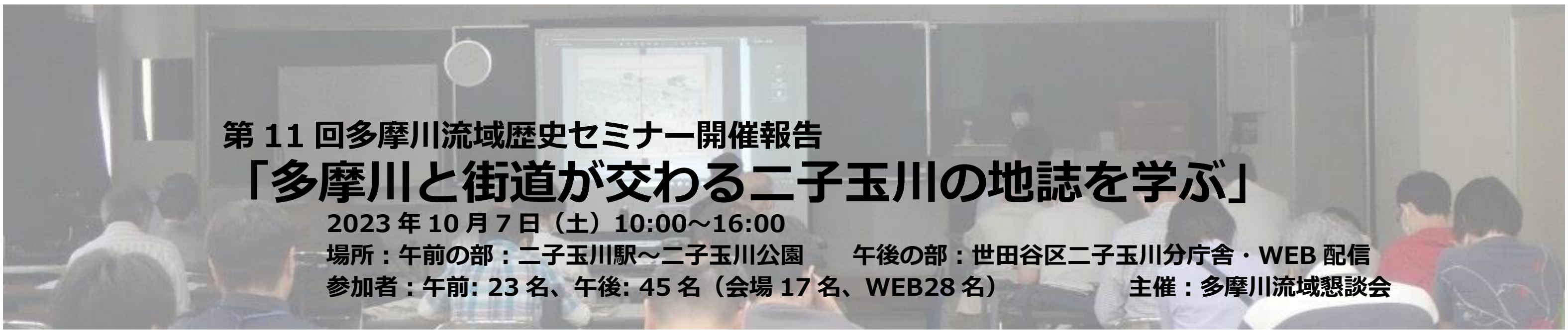
・どんな形で堤防が切れているのかということを、一度きちんと土木の人が解析してみるということをやるといいのかなと思います。武田信玄の霞堤と比べると、ちょっとぶつ切り過ぎるなみたいなところもありますね。つなごうと思ったけど、まだつながっていないだけなのか、霞堤だとしたらば、どこをどんなふうに守ろうとしたのかとか、何か研究の余地がありそうな気がして、とても面白い史料ではないかなと思いました。

(9)　多摩川舟運はいつごろから衰退していくのか。陸運の影響を受けているのか。

〇角和氏

・衰退した原因としては、やはり鉄道、陸運の影響は大きかったと思います。水運のメリットというのは大量に運べるというところがあったと思うので、結局それが鉄道によって代替されるようになりますと、多分、鉄道のほうが圧倒的に安く、しかも速く行けたのではないかなと思います。

・具体的に衰退した時期というのは、正確なところはあまり分かっていなくて、史料を見ている中では、少なくとも明治の半ばぐらいまでは明らかに盛んにやっているのです。また多摩川は、砂利を掘って、それを運ぶということをやっていたのですけれども、砂利船というものが戦前まで見られています。昭和初期は普通に見られたと思いますが、戦前ぐらいなのかなというぐらいです。



(10)　いかだ道というのは、喜多見の辺りしかないのか。

〇角和氏

・いかだ道というのは、基本的に六郷のほうからずっと上流のほうに上がっていく道ですので、別に喜多見に限らず、ずっと大田区のほうから連なっている道です。ばくちでお金を全部巻き上げられてという話は、私も調べている中でよく出てきました。どこまで本当かはわかりませんが、実際そういうこともあったのではないかなと思います。

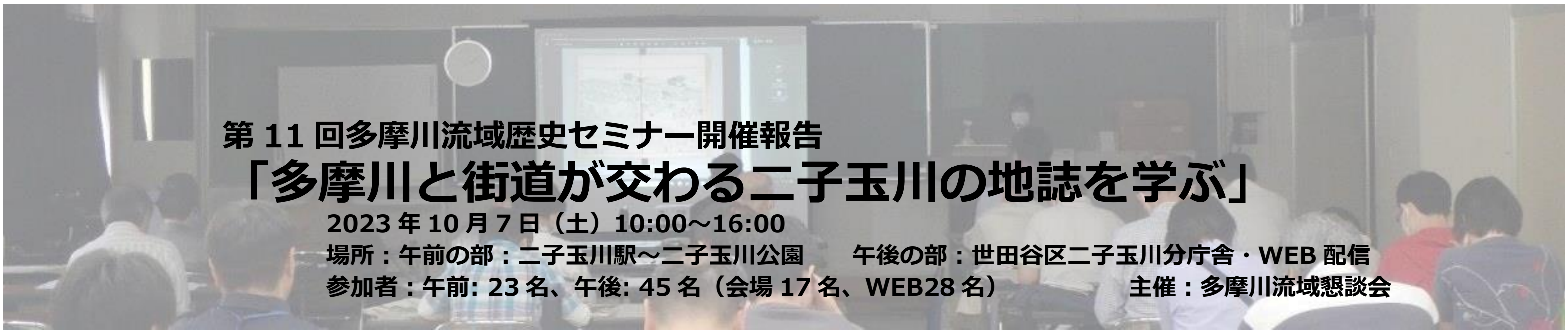
(11)　多摩川の河原は、今と同じか、それとももっと違うのか。

〇小野氏

・今の多摩川と昔の多摩川の一番大きな違いというのは、玉石が非常に多くて、すごく目立っていたのですよね。だから「玉川」という川の名前がついたということは、これは万葉集等の古代の史料を見ていくと明らかだと思います。それが近代以降の砂利採取の中で大幅に失われて、今のような景観になっていったというふうに言えるかと思います。もう1つ史料として残っているのは、「石瀬河（いわせがわ）」という言い方があるのですよね。これは平安時代の半ばあたりなのですが、これは古代の史料に載っているもので、ここよりももう少し下流の大田区の辺りで、丸子橋が架かっている辺りというのは古代において多摩川の渡河点だったのですよね。最初は国府の辺りで多摩川を渡っていたのですが、9世紀ぐらいになりますと、丸子橋の辺りで渡っていました。それは「延喜式ルート」というように歴史の人は呼んでいるのですが、あの辺りの古い史料で、石瀬河、あるいは「いはせのわたり」というふうに和歌でも詠まれたりしておりまして、石の瀬なのですよね。それだけ石の多い、石が目立った瀬がある川ということでイメージされてきましたので、その辺の石、玉石の存在が今とは全くイメージの異なるところかと思います。

〇神谷氏

・今の多摩川は、これが多摩川だと思って見ていると、とても寂しくて、どういう川に戻していきたいかというか、本来の多摩川にしていきたいか、そういうことがこういうセミナーをやっている目的でもあるということになります。砂利採取の時代、高度成長のときにたくさん砂利を採取して、それが都市建設のためのコンクリートに使われたわけですね。その結果、河床が下がってしまって、いろいろな問題が出てきていて、その問題の1つに、川の水位が下がってしまったことによって、武蔵野台地の地下水の水位全体が下がってしまったわけですね。そういうことでいろいろな湧水も減ったり、かなり広い範囲に大きな環境の影響を与えたりということがあったということですね。



〇横田氏

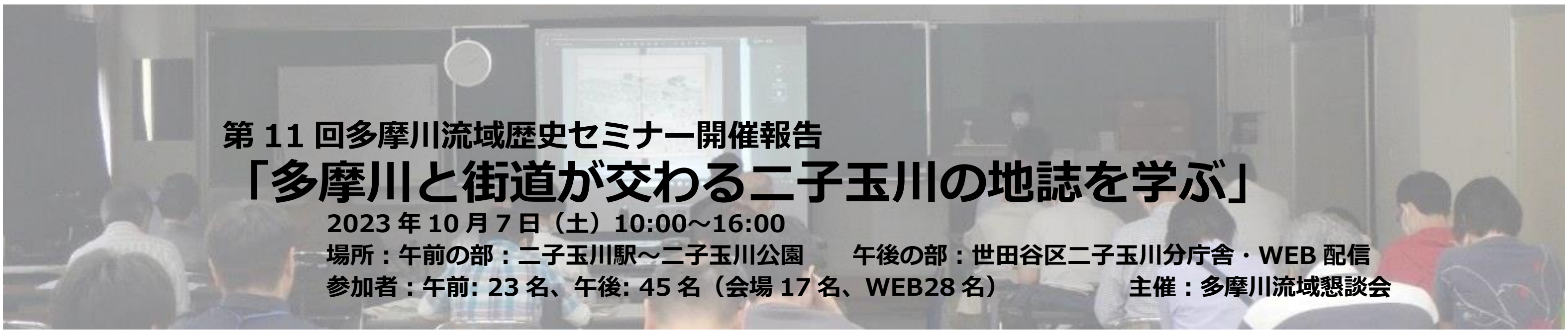
・東京都市大学は、玉堤地区の大学で、玉堤という名前もそうですし、川とのかかわりが深い大学です。遊宴地から、だんだん遊休地に変わって、そして開発され、市街化に移っていったという、その過程も、やはり川がダイナミズムを失うとともに、川の周りの環境もかなり人工化といいますか、そういった形で変わっていったのだろうと思います。恐らく周りにあった水田なんかも、細かい水路がたくさんあったのでしょうけれども、そういったものが住宅地の排水系統に変わり、そういう形で先ほど来ありました川の在り方というものの変化が、今ある市街地の基盤をつくっていったというような経緯が非常に色濃い地域ではないかなと思います。

〇神谷氏

・砂利採取の功罪もあるんだけれども、先ほど小野さんからお話があったように、多摩川の玉石、これも本当に主要な材料として多摩川沿線ではたくさん玉石積みの擁壁とかに使われてきたわけですね。これまた、その玉石自体が上流に行くほど大きいわけで、だんだん小さくなってきて、この辺までは玉石積みのいろいろな構造物がたくさんあったわけです。今は玉石も使えなくなってしまっていて、玉はギョクですからね、やはり大事なものなのだけれども、多摩川流域で、ここは昔の「玉川」を冠している地名の場所で、世田谷区の玉川地区なわけですね。この玉川の源流というのは、江戸時代には今の多摩川源流ではなくて、小菅川という川のほうの玉川という川があるのです。そっちが源流で、そこにも玉川地区という字（あざ）が残っているのですよね。

〇小野氏

・多摩川の語源についてのお話がありましたけれども、なぜ「タマガワ」と呼ぶようになったかというと、「タマ郡」を流れている川だから「タマガワ」になったのではないのです。それ、逆なのですよね。「タマガワ」という川の名前は全国たくさんあるのです。平安時代頃に「六玉川」といいまして、6つの玉川というものが歌枕としてまとめられましたけれども、それ以外にも古代・中世の史料で確認できる「タマガワ」という名前の川はたくさんあるのです。それに対して、「多摩」という地名はほとんどないのです。「玉川」という川の名前は自然発生しやすいということができます。河原の石を玉に見立てるという発想は古代の文学の中で非常に多いので、これは明らかに「タマガワ」というのは河原石が非常に多くて、きれいで、目立ったので「玉川」という名前になったと、これは間違いないと思います。それがなぜ2文字になって「多摩川」になったかというと、これは奈良時代の初めに地名を2文字に統一するという指令が国家から出たのです。和銅3年に1文字の地名も2文字に分ける、分けるときも、いい字を用いなさいというような話がありまして、そこで玉川が流れていたので「玉郡」とつけた地名を、1文字だったので、いい名前にしようということで「多磨」と書いたのですね。多く磨けば玉となるというような感じだったのだと思うのです



が、それで2文字にしたと。それで多磨郡になって、いつしか川の名前も2文字の多磨川（多摩川）になったというような経緯が考えられます。そこでずっと2文字で来ていたのですが、江戸時代、ちょっと風流を好むというような文化が出てきましたので、その中で「玉」を使うようになったと。それと並行して、水運と交易の中心的な活況を呈するようになったと。しかも将軍家が上覧に来るような、玉川の中においても名所になってきたというところで、玉川全体の文化的な拠点の1つになってきたと思うのです。そういったところに昔ながらの「玉川」を残していったと、そういうストーリーが―偶然かどうか分かりませんけれども、「玉川」という「タマガワ」が、この二子玉に残っているというのは非常に意義のあることだなというふうに思った次第です。

(12)　分断されてしまった村についてのお話についても触れていただき、現代の我々の住み方、地域の在り方みたいな話をお聞きしたい。

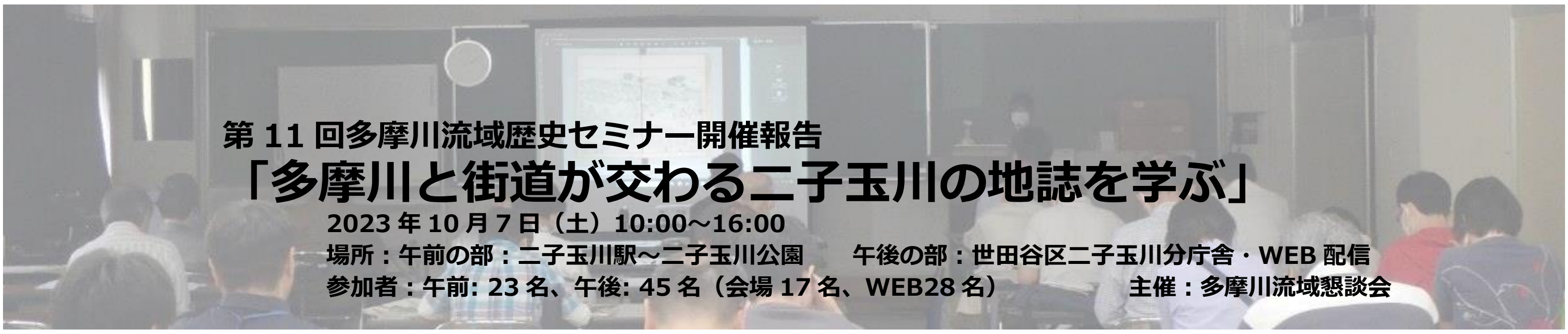
〇角和氏

・私は、世田谷区立郷土資料館なので、つい世田谷ばかり見ていたのですけれども、今、府中のほうにも押立とか、あと一宮とか、結構、上流側にも両岸に同じ地名があると伺って、必ずしもこの地域のことだけではないんだなと改めて思いました。

・結局、分断された村の在り方というところで、今は川向こう、さっき等々力緑地の話をしましたけれども、等々力緑地はあくまで行政区分的には川崎市で、ただ、世田谷区等々力というのもあって、これはもう本当に後づけというか、近代になって正確な年代は忘れましたけれども、明治の終わりだったかに、神奈川県と東京都の境目を決めるというところでやっと分けられたという経緯があるだけであって、多分、昔の人は「川向こう」ということをそんなに意識していないというか、あくまで日常生活圏というような意識だったのではないかなと思います。

・例えば今もそうだと思うのですが、川向こうに住んでいるけれども、菩提寺はこっち側とか、少し前の話だと、消防組は川向こうとこっち側が一緒とか、川というのが必ずしも隔てるものではなかったというか、今だと東京と神奈川の境みたいなイメージがあるのですけれども、昔の人はそういう感じがなかったのではないかなというふうに史料を読んでいると感じるところがあります。

・そう言いながら、さっきも言ったように、行政区分にこだわりがちな自治体職員的には、川向こうの川崎のことをあまり調べていなくて、もうちょっと一体的に研究する必要はあるかなというふうに、今、神谷先生からのお話も伺って、現在の生活という個人的なところでは思いました。



3.4　閉会挨拶

京浜河川事務所の藤枝氏より閉会の挨拶をいただき、第 11 回多摩川流域歴史セミナーを閉会としました。

＜主な内容＞

・どうしても多摩川の水運というと渡し船のイメージがあったものですから、それではなくて舟運、本当の物資輸送にも使われていたというところで新しい発見がありました。

・舟運が復活するといいなというお声も頂きましたけれども、今、国土交通省では河川利用の観点から舟運をもう少し見直そうということで、いろいろ取り組んでいるところです。

・実際に羽田空港まで大田区のほうから船が出ている便もございますので、そういったものがもうちょっと広がっていくと、河川の利用とか親しみやすさというところで発展していければいいのかなと思っています。

以上